

令和三年十月十日発行
皇學館論叢第五十四卷第三号 抜刷

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考

川
口
雅
昭

皇學館論叢 第五十四卷第三号
令和三年十月十日

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考

川口雅昭

はじめに

吉田松陰が安政三年（一八五六）から翌四年にかけ、実家杉家の幽囚室で行った教育、いわゆる幽囚室教育は後の松下村塾教育に直結していたとする見解と別物とする見解がある。⁽¹⁾ところが、管見の及ぶ限り、この問題どころか、幽囚室教育からして、これまでのところ精緻な分析を行った研究はない。

そこで、本稿では予備研究として、安政三年八月から翌四年十一月までの間、松陰が幽囚室で行った「勉強会」の月毎の変遷を分析し、松陰の幽囚室教育を論考する。

幽囚室における月別教育活動状況

一 安政三年

(一) 八月以前

安政三年八月二十二日に始まる「丙辰日記」以前の、幽囚室における松陰の教育活動をうかがうことのできる史料は「野山獄読書記」である。

それによると、安政三年三月の条に「外史十四 瀧生の為めに読む 十八日より 二十四日了」⁽²⁾とある。管見の及ぶ限り、これが、野山獄以来の「孟子講」⁽³⁾を除けば、幽囚室での教育活動の嚆矢である。この「瀧生」とは松陰の従兄高須為之進の縁者高須瀧之允のことと思われる、松陰の血縁者である。よって、この安政三年三月における松陰の教育は血縁者を対象とする家庭教育であった。

また、同じ三月の条の「三月二十八日より做さんと欲する所」の項目中に、「七月より」の予定として「松下村塾記」⁽⁴⁾とある。これより、すでにこの三月の時点で、外叔久保五郎左衛門などから「松下村塾記」の執筆依頼を受けていたことが分かる。

その後、四月の条に「文章軌範続三冊 毅甫の為に」⁽⁵⁾、六月には「通鑑一冊〈卷一 卷二〉 佐々木龜と対読す」⁽⁶⁾、七月、「外史一 家兄と対読す」⁽⁷⁾、「小学三四 佐梅の為に読む」⁽⁸⁾、「下学邇言一冊 家兄と対読す」⁽⁸⁾、「陳龍川文一 高・玉両生」⁽⁸⁾、「明德記三冊 佐梅生」⁽⁷⁾とある。そして、八月、「武教小学 二十二日より」⁽⁸⁾の記録を見ることができるとある。

この時期の参加者である。「毅甫」≡玉木彦介は従弟、「佐々木龜」≡佐々木龜之助・「佐梅」≡梅三郎兄弟は杉家

と「家屋隣接せる」^⑤地縁者、「家兄」は兄杉梅太郎、「高・玉」は血縁者高須瀧之允、玉木彦介である。つまり、この時期の教育は血縁・地縁者を対象とする、家庭教育であった。

また、松陰は、「佐々木龜」^⑥佐々木龜之助と司馬公の『資治通鑑』を、「家兄」^⑦杉梅太郎とは頼山陽の『日本外史』・会澤正志斎の『下学邇言』を「対読す」と記している。これは、安政三年時二十七才の松陰にとつて、二十二才と比較的年齡に近い佐々木龜之助、また、二歳上の兄梅太郎は教育対象などではなく、自分の学問のための切磋琢磨の相手と意識していたから、こう記したものであろう。

一方、「毅甫」^⑧従弟玉木彦介（安政三年時十六歳、以下同）には『文章軌範統』、「佐梅」^⑨佐々木梅三郎（十七歳）には『小学』・『明德記』、「高・玉」^⑩血縁者高須瀧之允（二十二歳）、従弟玉木彦介には『陳龍川文抄』をテキストとして使用している。また、玉木彦介・佐々木梅三郎・高須瀧之允に対しては、「ために」とか「ために読む」とある。これは松陰が彼らを教育対象と見ていたからであろう。

また、使用テキストの内、自分の学問用テキストの内、『日本外史』・『下学邇言』は和書、『資治通鑑』は漢籍である。和書中心であった。

一方、教育用テキストは、室町時代の軍記物『明德記』のみ和書で、他は『文章軌範統』・『小学』・『陳龍川文抄』であり、漢籍中心である。これは松陰が初学者に対し、漢籍での基礎学力養成を考えていたからであろう。とりわけ、玉木彦介や佐々木梅三郎、高須瀧之允に対しては『小学』という、入門的なテキストも使用しているところに、松陰の意図をうかがうことができる。

者 等							形態	記録者（全松陰）・勉強以外の 来室者名
29歳	22歳	不明	—	不明	—	—		
杉梅太郎	高洲瀧之允					久保五郎左衛門	開講す	玉本文之進【参考】松崎武人、 柱島へ帰省す
	高洲瀧之允						校離す	
							対読す	佐々木龜之助 2・梅三郎 2・倉 橋直之助・玉木彦介
							対読す	
							校す	佐々木龜之助・梅三郎・倉橋直 之助・玉木留宿（爾後例となる）
							対読す	佐々木梅三郎→玉木と共に久保 塾へ
							校離	外史補の校離卒ふ
							読む	
								岡田以伯、玉本文之進「自ら新 論を課す」
								岡田以伯・松岡良哉、玉本文之 進「自ら新論を課す」
								勉強の記録なし
							読む	
							読む	
		倉橋直之助					講ず	
							読む	
				山賀生			読む	
								高洲瀧之允（「外史補二冊を携 へて去る」）
							読む	
								「来る人なし」
							読む	
	高洲瀧之允						読む	
			杉百合之助				読む	
		倉橋直之助				久保五郎左衛門	講ず	
							読む	
			杉百合之助				校す	
	高洲瀧之允						読む	
							読む	
							読む	
			杉百合之助				校す	
			杉百合之助				校す	『経済要録』は全部校正

表1 安政三年 丙辰日記・野山獄読書記にみる使用テキスト、来室者など 1/5

	日付	テキスト				来室					
		安政3年時の年齢		松陰27歳		16歳	15歳	16歳	14歳	17歳	22歳
		和書	回	漢籍	計						
1	8月22日	武教全書			6			玉木彦介		佐々木梅三郎	佐々木龜之助
		日本外史補の校讎									佐々木龜之助
2	8月23日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
3	8月24日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
		日本外史補の校讎						玉木彦介			佐々木龜之助
4	8月25日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
		日本外史補の校讎									佐々木龜之助
5	8月26日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
6	8月27日										
7	8月28日										
8	9月1日										
9	9月2日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
10	9月3日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
11	9月4日	武教小学			3			玉木彦介		佐々木梅三郎	
12	9月5日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
		新論	1		1						
13	9月6日										
14	9月7日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
15	9月8日										
16	9月11日			蒙求	1			玉木彦介			
17	9月20日	陰徳太平記	1		1						
		経済要録	1		1						
18	9月21日	武教小学	3		4			玉木彦介		佐々木梅三郎	
				蒙求	1			玉木彦介			
		経済要録									
19	9月22日	陰徳太平記	2		1						
20	9月24日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
21	9月25日			資治通鑑	1						佐々木龜之助
		経済要録									
22	9月27日	経済要録									

者 等							形態	記録者（全松陰）・勉強以外の 来室者名
29歳	22歳	不明	—	不明	—	—		
							読む	増野徳民来→入塾
			杉百合之助				校す	
							読む	「十五葉を」「課題と為す」
							読む	
							読む	
			杉百合之助				—	
							—	
			杉百合之助				—	
							—	
							—	
			杉百合之助				—	
							—	
							—	
							講じ了る	「玉彦・佐梅・倉直と血盟す」 ←武教全書講録。新参の増野は 入っていない
							—	
							読む	
			杉百合之助				校す	
							—	
							読む	
							—	
			杉百合之助				—	この日「烏絲欄紙」（原稿用紙 の墨罫のこ）を印刷する
							—	
							読む	
							—	
							読む	
							—	
			杉百合之助		玉本文之進		読む	松陰は「余は与らず」とあり
							—	
							—	
							—	
			杉百合之助				読む	

表1 安政三年 丙辰日記・野山獄読書記にみる使用テキスト、来室者など 2/5

	日付	テキスト				来室					
		安政3年時の年齢		松陰27歳	計	16歳	15歳	16歳	14歳	17歳	22歳
		和書	回	漢籍							
23	10月1日			左伝	1	増野徳民					
		経済要録									
24	10月2日			左伝	1	増野徳民					
25	10月3日			左伝	1	増野徳民					
		陰徳太平記			1				佐々木梅三郎		
		経済要録									
26	10月4日			左伝	1	増野徳民					
		経済要録									
27	10月5日			左伝	1	増野徳民					
		陰徳太平記			1				佐々木梅三郎		
		経済要録									
28	10月6日			左伝	1	増野徳民					
		陰徳太平記			1				佐々木梅三郎		
		武教小学	1								
29	10月7日			左伝	1	増野徳民					
				資治通鑑	1						佐々木龜之助
		柳子新論									
30	10月8日			左伝	1	増野徳民					
		陰徳太平記			1				佐々木梅三郎		
31	10月9日			左伝	1	増野徳民					
		柳子新論	9								
32	10月10日			左伝	1	増野徳民					
				陳龍川文	1		玉木彦介				
33	10月11日			左伝	1	増野徳民					
		陰徳太平記			1				佐々木梅三郎		
34	10月12日			左伝	1	増野徳民					
		藤田幽谷の上書									
35	10月13日			左伝	1	増野徳民					
		陰徳太平記			1				佐々木梅三郎		
				陳龍川	1		玉木彦介				
		弘道館記述義	1		1						

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

者 等							形態	記録者（全松陰）・勉強以外の 来室者名
29歳	22歳	不明	—	不明	—	—		
							-	
							-	
								玉本文之進・久保五郎左衛門来話
							-	
								玉本文之進来る
							-	
							-	
								中谷正亮来話。朝まで
							読む	阿嫂群妹のため
							-	
							-	
							-	
			杉百合之助				校す	
							-	
							-	
							-	
			杉百合之助				卒る	
							-	
							-	
		倉橋直之助					読む	
								佐々木謙藏・高橋藤之進来る
							-	
			杉百合之助				校す	来原良三来る
							-	
		倉橋直之助					-	
							-	
			杉百合之助				校す	
							-	
							-	
							-	
							-	
							-	
							-	
							-	
								松岡良哉・土屋松如来る

表1 安政三年 丙辰日記・野山獄読書記にみる使用テキスト、来室者など 3/5

	日付	テキスト				来室					
		安政3年時の年齢		松陰27歳		16歳	15歳	16歳	14歳	17歳	22歳
		和書	回	漢籍	計						
36	10月14日			左伝	1		増野徳民				
				資治通鑑	1						佐々木龜之助
37	10月15日			左伝	1		増野徳民				
38	10月16日			左伝	1		増野徳民				
				資治通鑑	1						佐々木龜之助
		武家女鑑	1								
39	10月17日			左伝	1		増野徳民				
40	10月18日			左伝	1		増野徳民				
41	10月19日			左伝	1		増野徳民				
		弘道館記述義	1								
42	10月20日			左伝	1		増野徳民				
				陳龍川	1			玉木彦介			
				資治通鑑	1						佐々木龜之助
		弘道館記述義									
43	10月21日			左伝	1		増野徳民				
		陰徳太平記			1					佐々木梅三郎	
				礼記	3		増野徳民			佐々木梅三郎	
44	10月22日			左伝	1		増野徳民				
		海防備論									
45	10月23日			左伝	1		増野徳民				
				礼記	1						
				陳龍川	1				玉木彦介		
		海防備論									
46	10月24日			左伝	1		増野徳民				
				資治通鑑	1						佐々木龜之助
47	10月25日			左伝	1		増野徳民				
		陰徳太平記	8		1					佐々木梅三郎	
				資治通鑑	1						佐々木龜之助
48	10月26日			左伝	1		増野徳民				

者 等							形態	記録者（全松陰）・勉強以外の 来室者名
29歳	22歳	不明	—	不明	—	—		
							—	
杉梅太郎							読む	初回。以後、一、七を定日とす
							—	
							—	
			杉百合之助				校了	
							—	
			杉百合之助				読む	毎夜一巻を課題とし、来月を以て終える。小幡良右衛門来る
							—	
			杉百合之助				読む	「博議一冊、左伝一冊。本月の内一日に二冊を課と為す。評語下一冊 反評」は松陰一人の読書及び執筆カ
							—	
			杉百合之助				—	
							—	「唐書一冊」とあり
							—	
							読む	
								兒玉兵衛門来る
							—	
							—	来原良三来る
							—	中谷正亮来る。夜を徹して劇談す
							—	中谷、申時去る
							—	
杉梅太郎							読む	
							—	
							—	
							—	
							—	吉田榮太郎来る
							—	
			杉百合之助				—	
							—	
			杉百合之助				—	
							—	
杉梅太郎							—	中村道太郎・土屋彌之助来る
			杉百合之助				—	

表1 安政三年 丙辰日記・野山獄読書記にみる使用テキスト、来室者など 4/5

	日付	テキスト				来室					
		安政3年時の年齢		松陰27歳		16歳	15歳	16歳	14歳	17歳	22歳
		和書	回	漢籍	計						
49	10月27日			左伝	1		増野徳民				
				名臣言行録	1						
50	10月28日			左伝	1		増野徳民				
				陳龍川	1			玉木彦介			
		海防備論	3								
51	10月29日			左伝	1		増野徳民				
				左伝一卷	1						
52	10月30日			左伝	1		増野徳民				
53	11月1日			左伝二巻	1						
54				左伝	1		増野徳民				
55	11月2日			左伝	1		増野徳民				
				左伝	1						
56	11月3日										
57	11月4日			左伝	1		増野徳民				
				陳龍川	1			玉木彦介			
58	11月5日	陰徳太平記	1		1					佐々木梅三郎	
59	11月6日										
60	11月7日										
61	11月8日										
62	11月9日	陰徳太平記	2		1						佐々木梅三郎
				名臣言行録	1						
63	11月10日	陰徳太平記	11		1						佐々木梅三郎
				陳龍川	1			玉木彦介			
64	11月24日										
65	11月25日										
66	12月1日			晉語六	2	吉田榮太郎	増野徳民				
				左伝	1						
67	12月2日	日本外史			2	吉田榮太郎	増野徳民				
				左伝	1						
68	12月3日	日本外史			2	吉田榮太郎	増野徳民				
				名臣言行録	1						
69	12月4日			左伝	1						

者 等							形態	記録者（全松陰）・勉強以外の 来室者名
29歳	22歳	不明	—	不明	—	—		
							—	十二月八日の記録より、吉田築 太郎・増野徳民
							—	
			杉百合之助				—	
							講ず	
							—	
杉梅太郎							読む	久保五郎左衛門・松岡良哉来る
							—	中谷正亮来る。徹宵怪談す
							—	中谷、朝去る
							—	
							了る	午後、経板を印す、とあり
							読む	岡部繁之助来る
							—	
			杉百合之助				—	
							—	
							—	
			杉百合之助				—	
							—	
							—	
							—	
							—	
							—	
							—	
							—	
							—	
							—	渡邊源□来る。松崎生の書達す
							—	
							読む	
							了る	
							—	
							—	玉本文之進来る
							為め	
							—	
							—	妻木士保彌次郎来る
5	3	4	11	1		2	159	

表1 安政三年 丙辰日記・野山獄読書記にみる使用テキスト、来室者など 5/5

	日付	テキスト				来室					
		安政3年時の年齢		松陰27歳	計	16歳	15歳	16歳	14歳	17歳	22歳
		和書	回	漢籍							
70	12月5日			國語	2	吉田築太郎	増野徳民				
		日本外史			2	吉田築太郎	増野徳民				
				左伝	1						
71	12月6日			孝経	3	吉田築太郎	増野徳民	玉木彦介			
				國語	2	吉田築太郎	増野徳民				
		農家益	1		1						
72	12月7日				0						
73	12月8日			國語	2	吉田築太郎	増野徳民				
		日本外史			3	吉田築太郎	増野徳民	玉木彦介			
74	12月9日			國語	2	吉田築太郎	増野徳民				
75	12月10日			父師善誘法	1			岡部繁之助			
		日本外史			3	吉田築太郎	増野徳民	岡部繁之助			
				左伝	1						
76	12月11日			唐鑑	0						
		日本外史			3	吉田築太郎	増野徳民	岡部繁之助			
				左伝	1						
77	12月12日			唐鑑	0						
				父師善誘法	1			岡部繁之助			
78	12月13日			唐鑑	0						
				父師善誘法	1			岡部繁之助			
79	12月14日			唐鑑	0						
		日本外史			3	吉田築太郎	増野徳民	岡部繁之助			
80	12月15日	日本外史			3	吉田築太郎	増野徳民	岡部繁之助			
81	12月16日			唐鑑	0						
82	12月17日			唐鑑	0						
		日本外史			3	吉田築太郎	増野徳民	岡部繁之助			
				唐鑑	2	吉田築太郎	増野徳民				
83	12月18日			父師善誘法	1			岡部繁之助			
		日本外史			3	吉田築太郎	増野徳民	岡部繁之助			
				唐鑑	2	吉田築太郎	増野徳民				
84	12月19日	兵要録	1		1			岡部繁之助			
		日本外史			3	吉田築太郎	増野徳民	岡部繁之助			
85	12月20日	日本外史	12		3	吉田築太郎	増野徳民	岡部繁之助			
		8冊		11冊	159	20	54	14	13	15	17

氏名 は個人教育。

(二) 八月

安政三年八月二十二日、松陰は「親戚子弟の請に応じ」^⑩て『武教全書』の勉強会を開始した。同時に「丙辰日記」を始めた。表1は「丙辰日記」「野山獄読書記」よりまとめた安政三年八月から同年十二月までの勉強会実施日、使用テキスト、来室者などの一覧である。

また、表2は八月の教育活動状況である。

表1・2より、八月は

一、記録のある七日間に 延べ三名(実数三名)が一回の勉強会に参加した。

二、「生徒」^⑪教育用テキストは『武教全書』のみで、和書一〇〇%、勉強会は講義形式、集団教育の『武教全書』会である。個人教育率は〇%である。参加者の内、兄杉梅太郎、外叔久保五郎左衛門、佐々木龜之助はオブザーバー参加と思われ、実質的な教育対象者は玉木彦介・佐々木梅三郎・「高洲瀧生」^⑫ 高須瀧之允の三名である。

三、佐々木龜之助と一対一で「対読す」^⑬とある『資治通鑑』会はこの月から十月まで十六回確認できる。これは松陰と龜之助のための学習会と思われるので、教育活動からは外す。以下同。

四、『武教全書』会参加者は全員血縁・地縁者で、外来者(他人)の参加率は〇%である。よって、家庭教育である。

五、『日本外史補』の「校讎」^⑭を松陰と佐々木龜之助が一回、それに高須瀧之允が加わって三人で一回、高須瀧之允を玉木彦介に変えて一回行っている。佐々木龜之助とはほぼ対等作業だったものと思われる。一方、高須や彦介は

表2 安政三年八月
丙辰日記にみる教育活動状況

			延べ数
			-
		武教全書	資治通鑑
1	玉木彦介	1	1
2	佐々木梅三郎	1	1
3	佐々木龜之助	0(1)	0(4)
4	杉梅太郎	0(1)	0(1)
5	高洲瀧之允	1	1
6	久保五郎左衛門	0(1)	0(1)
計		3(3)	0(4)

氏名 は血縁・地縁者。以下同。

数字 はオブザーバー参加。以下同。

数字 は松陰と一対一の「学問」会。

() 内は、非教育対象。以下同。

後学のために参加させたものであろう。

六、八月二十七日、二十八日に叔父玉木文之進が来室し、「自ら新論を課す¹⁵⁾」とある。これは幽囚室の松陰を心配した、監督・激励の意味での来室・自学と思われる。

(三) 九月

表3は九月の教育活動状況である。

表1・3より、九月は

一、記録のある十五日間に延べ十一名(実数五名)が七回の勉強会に参加した。

二、「生徒」教育用テキストは和書三冊、漢籍一冊である。テキスト別参加率は和書八一・八%で、和書中心の教育である。

『武教全書』会は、高洲瀧之允(＝高須瀧之允)を「先生の嫂の兄弟の家であつて、杉家の縁者である」倉橋直之助と変えて、他のメンバーと継続している。

三、「読む¹⁷⁾」として、個人教育の形で、高須瀧之允に「陰徳太平記」会を二回、玉木彦介に「蒙求」会を二回、「山賀生」に『新論』会を一回行っている。¹⁸⁾ 九月の個人教育率は四五・五%である。

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考(川口)

表3 安政三年九月 丙辰日記にみる教育活動状況

							延べ数	
		武教全書	陰徳太平記	経済要録	新論	資治通鑑	蒙求	-
1	玉木彦介	2					2	4
2	佐々木梅三郎	2						2
3	佐々木龜之助					0(6)		0(6)
4	高洲瀧之允		2					2
5	倉橋直之助	2						2
6	杉百合之助			0(1)				0(1)
7	山賀生				1			1
8	久保五郎左衛門	0(1)						0(1)
	計	6(1)	2	0(1)	1	0(6)	2	11(8)

数字は松陰と「生徒」、一対一での「個人教育」。以下同。

四、不明の「山賀生」を除けば、参加者は血縁・地縁者のみである。よって、外来者の受講率はほぼ〇%と見ていい。家庭教育である。

五、九月二十日、父杉百合之助と「読む」として、『経済要録』会を一回行っている。その後、翌二十一日の「夜、大人と要録の八を校す」¹⁹より、「十月朔日」の「夜、大人と要録の十一を校す」²⁰まで四回、校正作業を行っている。また、十月三日、「夜、要録十二」、同四日、「夜、要録十三」、同五日にも「要録十四、並びに前例の如し」²¹とあるのは、校正作業の意味であろう。これより、親子で一回『経済要録』会を行った際、何らかの不備を見つけたのであろう。そこで、以後は校正作業に変えたものと思われる。

六、『経済要録』の他、この九月から十月にかけて、父百合之助と『柳子新論』・『弘道館記述義』・『海防備論』の校正作業を行っている。

(四) 十月

この状態に変化が生じるのは十月である。表4は十月の教育活動状況である。

表1・4より、十月は

- 一、記録のある三十日間に延べ四十七名(実数四名)が四十五回の勉強会に参加した。
- 二、増野徳民の「来寓」²²が教育活動状況変化の主因である。松陰は増野を十月二十一日に一回のみ血縁者倉橋直之助、地縁者佐々木梅三郎らとの『礼記』会に参加させた。それ以外は、「来寓」当日の十月一日より十一月四日までのほぼ毎日、三十三回にわたり「読」むとして、個人教育の形で『春秋左氏伝』会を行っている²³。また、「読む」として、いずれも個人教育の形でこの月より、佐々木梅三郎に安政四年六月まで『陰徳太平記』会を十五回、玉木彦

介に翌安政三年十一月まで『陳龍川文』⁽²⁴⁾会を七回行っている。更に、十月二十一日の倉橋直之助、佐々木梅三郎、増野の『礼記』会の後、二十三日、倉橋に個人教育の形で、『礼記』会を一回行っている。十月の個人教育率は九三・六%である。

三、「生徒」教育用テキストは和書一冊、漢籍四冊である。テキスト別参加率は和書一七%、漢籍八三%であり、漢籍中心の教育である。

四、「読む」として、一対一で、兄杉梅太郎と安政三年十二月まで三回にわたる『名臣言行録』会を開始した。兄梅太郎と松陰のための学習会である。

五、増野への『春秋左氏伝』会とは別に、「読む」として、一対一で、父百合之助と安政三年十二月まで九回にわたる『春秋左氏伝』会を開始した。これは父百合之助と松陰のための学習会である。

六、十月十三日、「読む」として、一対一で、父百合之助と『弘道館記述義』会を行っている。これは父百合之助と松陰の学習会である。その後、同書を十九日、二十日の二日間、父と一対一で二回校正した。その他の校正作業では、十月五日、父百合之助との『経済要録』校正が終了した。また、十月七日、九日と二回、父

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

表4 安政三年十月 丙辰日記にみる教育活動状況

		陰徳太平記	弘道館記述義	左伝増野	陳龍川	資治通鑑	名臣言行録	左伝父百合之助	礼記21日	礼記23日	延べ数
1	増野徳民			30					1		31
2	玉木彦介				5						5
3	佐々木梅三郎	8							1		9
4	佐々木龜之助					0(6)					0(6)
5	杉梅太郎						0(1)				0(1)
6	倉橋直之助							1		1	2
7	杉百合之助		0(1)					0(1)			0(2)
	計	8	0(1)	30	5	0(6)	0(1)	0(1)	3	1	47(9)

百合之助と『柳子新論』の校正作業をした。二十二日、二十三日、父百合之助と『海防備論』の校正作業をした。なお、校正作業の記録はこの月以降見られない。

七、十二日、「玉丈人来り、家大人と幽谷の上書を読む。余は則ち与らず⁽²⁵⁾」とある。これより、十月になっても、依然、父及び叔父が松陰を心配し、監督・激励の来室・自学を続けていたことが分かる。

八、対象が特定できないので一覽表から外したが、「丙辰日記」十月十六日の条に「是の日、阿嫂群妹の爲めに武家女鑑の一を読む⁽²⁶⁾」とある。松陰が兄嫁、妹らと勉強会をしていたことが分かる。

九、外来者は増野のみであるが、延べ参加者における外来者増野の参加占有率は六三・八%で、この月、初めて外来者が血縁・地縁者の参加率を超えた。つまり、この十月より幽囚室教育は家庭教育から個人教育の形で「私塾」教育になった。

では、安政三年三月から九月まで行われた家庭教育と寺子屋・私塾教育との違いは何であろうか。私は現在のところ次のように考えている。

家庭教育は、(一) 血縁・地縁者の子弟に生きて行く上で必要な基礎的知識・技術・道徳などを教える必要がある親や大人の存在。(二) 親や大人に見習・聞習する子弟の存在。(三) この意味で、しつけが質量共に深化・拡大した「しつけ」教育である。

寺子屋教育は、(一) 子供に読み・書き・ソロバンという文字・計数能力や道徳規範などを学ばせる必要を感じる親の存在。(二) 親の勧めに従って徒弟奉公などの前提として、基礎教養修得を目指す寺子の「入門」。(三) 家計・儒学的価値における満足・村々の文化的中核としての責任、義務等より寺子教育を願う師匠の存在を基本的条件とした普通教育である。

また、私塾教育は、(一) 明確な教育目的、教育内容(学問・思想・技能)をもち、次世代の青年にそれを教えたいと願う師匠の存在。(二) その師匠に学びたいと願う外来者(他人)の参集を基本的条件とした専門教育である。

では、松陰はこの安政三年時、どのような教育目的・内容を抱いていたのであろうか。

教育目的は、安政元年三月、失敗に終わった「下田」事件⁽²⁷⁾「墨夷」⁽²⁸⁾「膺懲」⁽²⁹⁾の再蹶起に向けての同志・シンパサーの養成・獲得である⁽³⁰⁾。また、教育内容は、和漢の「義」の実践に生きた具体的な人物に学ぶ歴史教育が中心である⁽³¹⁾。この松陰の教育目的・内容は特殊である。よって、私塾教育とするには無理を感じる。この意味において、私はこの十月からの幽囚室教育を「私塾」教育とする。

では、この条件より、改めて増野に対する『春秋左氏伝』会の教育活動状況を見てみたい。

『春秋左氏伝』は貝原益軒の「読書法」に「史書の学習法 史は古をしるせるふみ也、記録のことなり。史書は、往古の迹をかんがへて、今日の鑑とする事なれば、是亦経につぎて必(ず)よむべし。経書を学ぶいとまに和漢の史をよみ、古今に通ずべし。(中略)日本の史は、日本紀以下六国史より、近代の野史に至るべし。野史も亦多し。ひろく見るべし。中夏の史は、左伝、四季、漢書以下なるべし」とある⁽³²⁾。これより、「経書」を終えた者が「つぎて必(ず)よむ」べき「中夏の史」だったことが分かる⁽³³⁾。

また、鎌田正氏は『春秋左氏伝』の内容を、「春秋は実に名分を正すことを主としたもので」、「孔子が春秋を制作した大義にいたっては、後の春秋学者によつて所説を異にするところはあがあるが、その根本とするところは、やはり孟子や司馬遷等の説くように、倫理を回復して社会の秩序を維持し、よつてもつて太平の世を樹立しようと企図したものであろう」と評している⁽³⁴⁾。これより、『春秋左氏伝』はレベル的に第一段階の「経書」教育を終えた者に適し、かつ、思想は松陰のそれとほぼ同じベクトルにあることが分かる。しかも、語る内容は紀元前の古代魯国の歴史である。将

に、眼前の内憂外患と対峙する松陰が志向する教育目的や内容をオブラートに包むものであった。つまり、「尊王」「攘夷」思想の基礎・準備教育用として最適なテキストであったことが分かるのである。

(五) 十一月

この状況は十一月になると再び変化する。表5は十一月の教育活動状況である。

表1・5より、十一月は

- 一、記録のある十二日間に延べ八名(実数三名)が八回の勉強会に参加した。
- 二、「生徒」教育用テキストは和書一冊、漢籍二冊である。テキスト別参加率は和書三七・五%、漢籍六二・五%であり、漢籍中心の教育である。増野への『春秋左氏伝』会、彦介への『陳龍川文』会、佐々木梅三郎への『陰徳太平記』会は前月からの継続で、この月新しく開始した勉強会はない。

三、全て個人教育で、個人教育率一〇〇%である。なお、この月は記録も少なく、勉強会全体が減少している。

この原因は何か。松陰の「借本録」⁽³⁵⁾によれば、十月二十一日から十一月十九日にかけて、表6にあるように、『本朝烈女伝』・『陰徳太平記』・『唐書』・『名臣言行録』・『國語』などを近隣よりを借りていることが分かる。

私はこの借本が勉強会減少の原因ではないかと見ている。その理由は

表5 安政三年十一月 丙辰日記にみる教育活動状況

						延べ数	
		陰徳太平記	左伝増野	左伝百合之助	陳龍川	名臣言行録	
1	増野徳民		3				3
2	玉木彦介				2		2
3	佐々木梅三郎	3					3
4	杉百合之助			0(2)			0(2)
5	杉梅太郎					0(1)	0(1)
	計	3	3	0(2)	2	0(1)	8(3)

表6 借本一覧（「借本録」より）

	日		付		借本書名	どこから	備考
	安政三年		安政四年				
1	正月				古事記伝	瀬能	
2	10	21			本朝烈女伝 六冊	瀬能	
3	10	21			陰徳太平記 卷一 より卷二十迄	高須	
4	10	22			四庫全書簡明目録 二帙	中谷	
5	10	22			唐書 五冊	佐々木	
6	10	27			名臣言行録 四冊	井上	
7	11	9			太平御覧 百十冊	中谷	
8	11	9			韓非子全書 一冊	中谷	
9	11	23			國語 四冊	中谷政亮	
10	11	23			唐鑑	中村百合藏	
11	11	23			艸訣百韻歌 一冊		
12	11	19			名誉三十六佳撰		
13	11	19			古事記伝 十一よ り十五迄	瀬能	
14	11	19			国号考	瀬能	
15	11	19			前赤壁賦		
16	12	10			鈴屋翁略年譜		
17	12	10			山陽詩抄	松岡良哉	
18	12	12			日本外史二部	福川犀之助	
19	12	19			外蕃通書	岸御園	
20			正月	11	春秋左氏伝校本 十四冊	齋藤	増野徳民 が「持往」
21			正月	28	陰徳太平記 二十 より四十迄	佐々木	
22			正月		古事記伝 十冊	瀬能	
23			2	21	神皇正統記	土谷	

こうである。松陰でさえこれ程の借本をしているということは、蔵書をそれ程持っていなかったということである。来室者もつと持っていなかったであろう。しかし、当時の教育にも、最低限のテキストは必要だったはずである。よって、テキストを作る必要があった。借本・写本・校正など、テキスト作成作業である。松陰はこの作業に追われていたのではないか。これが借本を原因とみる根拠である。

また、これより、あるテキストの勉強会への参加の主導権は「師」である松陰にあり、「弟」＝「生徒」である来室者ではなかったと見ることが出来る。この点では、幽囚室教育は一般的な寺子屋・私塾同様、否、それ以上に「師匠」である松陰により、「教育の方針・内容・方法などが規制されていた」⁽³⁶⁾ものと見てよからう。

四、外来者は増野のみで、外来者の参加占有率は三七・五％と血縁・地縁者を下回っている。しかし、外来者増野の存在があり、准「私塾」教育である。

五、テキスト別参加率は、和書は佐々木梅三郎への『陰徳太平記』会のみで三七・五％、漢籍は増野への『春秋左氏伝』会及び玉木彦介への『陳龍川文』会で六二・五％である。漢籍中心の教育と見ることが出来る。

六、父百合之助との『春秋左氏伝』会、兄梅太郎との『名臣言行録』会は継続している。依然、父百合之助、兄梅太郎が松陰を心配、監督・激励している証左であろう。

(六) 十二月

十二月、幽囚室教育は大きく変化する。表7は十二月の教育活動状況である。

表1・7より、十二月は

一、記録のある二十日間に延べ五十五名(実数四名)が二十五回の勉強会に参加した。

二、この変化の主因は、十一月二十五日の吉田榮太郎、十二月十日の岡部繁之助の来室である。その結果、外来者は増野・榮太郎・岡部の三名となった。外来者の参加占有率は九六・四％である。

三、この月、かつて佐々木龜之助と「校」した『日本外史』をテキストとした勉強会を開始している。この『日本外史』会は翌安政四年一月まで二十三回行われた。参加頻度の高いのは吉田榮太郎、増野徳民の二人で、共に十二月十二回、

翌安政四年一月十一回の計二十三回参加している。その他、岡部繁之助が十二月八回、翌安政四年一月八回の計十六回、玉木彦介が十二月一回、翌安政四年一月七回の計八回、佐々木謙藏が安政四年一月に二回、弟梅三郎が一回参加しており、述べ七十三名が参加した。

なお、この月、『日本外史』への述べ出席数は全体の六〇%を占めた。では、『日本外史』会の意味するものは何であろうか。

『日本外史』は頼山陽が二十余年の歳月をかけて執筆し、文政十(一八二七)年に松平定信に献じた歴史書である。漢の司馬遷の『史記』の体裁になり、源平両氏から徳川氏まで武家十三氏の盛衰興亡の跡を漢文で記したものである。尾藤正英氏は「幕末から明治にかけて、『日本外史』ほど多くの読者をもった歴史書はなかった。(中略)本書がそのように広く愛読された理由としては、まず文章の優れていることと、内容の親しみ易さとが挙げられる。(中略)山陽の文章は、当時の文人の水準からすれば平明であって、多数の読者に理解され易い性格を備えていた。(中略)『日本外史』では、個々の人物の人間像を描写し、その心情の美しさ、行動の正しさや勇ましさを顕彰することに主眼がおかれていて、直接に読者の心情にふれる要素が大きい。人々はそれを読むことを通じて、武士としての生き方を、あるいは日本人としての人生観を、学ぶことがで

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考(川口)

表7 安政三年十二月 丙辰日記にみる教育活動状況

										延べ数		
		日本外史	兵要録	農家益	父師善誘法	晉語	國語	孝経	唐鑑	左伝百合之助	名臣言行録	-
1	吉田榮太郎	12				1	4	1	2			20
2	増野徳民	12				1	4	1	2			20
3	玉木彦介	1						1				2
4	岡部繁之助	8	1		4							13
5	杉百合之助									0(6)		0(6)
6	杉梅太郎			0(1)							0(1)	0(2)
	計	33	1	0(1)	4	2	8	3	4	0(6)	0(1)	55(8)

きたのである。(中略) 本書では『勤王』もしくは『尊王』が武士にとって至上の道徳的義務とみなされている点⁽³⁷⁾が特質と評している。

以上より、『日本外史』は、(一)「文章」が「優れて」おり、かつ「平明」であり、初心者向けであったこと。(二)「個々の人物」の「心情の美しさ」「行動の正しさや勇ましさを」「顕彰することに主眼がおかれて」おり、「直接に読者の心情にふれる要素が大きい」こと。(三)「武士」の「至上の道徳的義務」を「勤王」「尊王」としていること等より、「下田事件」後、再蹶起に向け同志・シンパサイザーの養成・獲得を目指して、教育を志向した松陰にとつてはベストな教育内容のテキストであったことが分かる。

四、新参の岡部繁之助に対してのみ、松陰は個人教育『兵要録』会を一回、『父師善誘法』会を四回行っている。この月の個人教育率は九・一％であり、個人教育は集団教育に比し減少傾向にある。これはこの十二月に、幽囚室における外来者への集団教育(集団への一斉授業であったか、それとも集団内での個別授業であったのかは不明だが)が開始された証左となる。つまり、家庭教育から「私塾」教育へ変化していた幽囚室教育に、更に個人教育から集団教育へという変化が認められる。

五、吉田榮太郎・増野徳民相手に『晉語』会一回、『國語』会四回、『唐鑑』会二回を行っている。また、この二人に玉木彦介を加え、『孝経』を「講」⁽³⁸⁾じている。

六、「生徒」教育用テキストは和書二冊、漢籍五冊である。テキスト別参加率は和書六一・八％、漢籍三八・二％であり、和書中心の勉強である。

七、十月からの父百合之助との『春秋左氏伝』会、兄梅太郎との『名臣言行録』会を継続している。また、新たに兄梅太郎と『農家益』会を行っている。依然、父百合之助と兄梅太郎が松陰を心配、監督・激励している証左である。

二 安政四年

表8は「野山獄読書記」「丁巳日乗」などよりまとめた安政四年一月から同年十一月までの勉強会実施日、使用テキスト、来室者などの一覧である。

(一) 一月

安政四年一月、松陰の勉強会は盛況の様相を見せる。表9は四年一月の教育活動状況である。

表8・9より、一月は

- 一、記録のある二十九日間に延べ百五十八名(実数九名)が五十六回の勉強会に参加した。
- 二、述べ参加者が多いのは、『日本外史』会四十名、『坤輿図識』会二十六名、『孟子』会二十五名(オブザーバー参加の佐々木龜之助を除く)、かつて父百合之助と「校」した書である『経済要録』会二十二名である。
- 三、個人教育として、玉木彦介に『方正学文粹』会を五回、佐々木梅三郎に『坤輿図識』会を一回、大賀春哉に『医学の要』会を一回、國司仙吉に『礼記』会を三回行っている。この月の個人教育率は六・三%であり、集団教育中心である。

四、吉田榮太郎・増野徳民・岡部繁之助・妻木彌次郎・大賀春哉・國司仙吉ら外来者の参加占有率は七〇・九%である。
五、「生徒」教育用テキストは和書九冊、漢籍四冊、不明一冊の計十四冊である。テキスト別参加率は和書七〇・九%、漢籍二六・六%、不明二・五%である。和書中心である。

六、四日の条に「夕飯後、岡部繁之助・増野徳民・榮太郎と外史八枚を受く。夜、岡部・佐々木謙藏・徳民・榮太郎と講釈す⁽⁴⁰⁾」とある。「丁巳日乗」はこの一月四日から一月十三日まで「門人」が記録している。つまり、この日の

「生徒」等												形態	記録者(全松陰)・勉強以外の来室者名		
國司仙吉	大賀春哉	熊野寅二郎	松陰	玉本文之進	妻木彌次郎	久保清太郎	土屋恭平	高橋藤之進	中谷	冷泉雅二郎	提山			佐世八十郎	
														-	松陰記録 勉強の記録なし
														読む	
														読む	
														講ず	
														受く	門弟記録
														受く	
														講釈す	テキスト不明
國司仙吉														-	
														-	
					玉本文之進									読む	
														読む	
														読む	「野山録読書記」には佐々木梅三郎とある
						妻木彌次郎								読む	
國司仙吉														読む	
														読む	
														読む	
														講ず	
														読む	松陰記録 勉強の記録なし
														-	
		大賀春哉												会講	
														読む	
														-	
														-	
		大賀春哉												論ず	
														-	
														-	
國司仙吉														-	
		大賀春哉												-	
														読む	
														講ず	門弟記録
														読み	
														読む	
														読む	
														講ず	「経済要録終る。坤輿図誌を読む」とあり
														読む	
														読む	
														読む	
														読む	夏後、「会講」あり。岡部繁之助・佐々木謙藏・玉木彦介・増野徳民・吉田榮太郎参加

表8 安政四年（総合）野山獄読書記・丁巳日乗にみるテキスト、「生徒」、来室者など 1/3

	日付	テキスト			対 象										
		安政4	和 書	漢 籍	計	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助	佐々木梅三郎	佐々木謙藏	佐々木龜之助	杉梅太郎	有吉熊次郎	馬島春海
1	1月1日														
2	1月2日	経済要録			2	吉田榮太郎	増野徳民								
3	1月3日		方正学文粹		1			玉木彦介							
			孟子		5		増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助		佐々木謙藏	佐々木龜之助			
4	1月4日		方正学文粹		1			玉木彦介							
		日本外史			3	吉田榮太郎	増野徳民		岡部繁之助						
		テキスト不明			4	吉田榮太郎	増野徳民		岡部繁之助		佐々木謙藏				
5	1月5日		礼記		1										
			禹貢		2			玉木彦介	岡部繁之助						
6	1月6日		牧民忠告		1										
		日本外史新田氏			4	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助						
7	1月7日		坤輿図識		1					佐々木梅三郎					
			禹貢		4			玉木彦介	岡部繁之助		佐々木謙藏				
			礼記		1										
			経済要録		3	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介							
8	1月8日	日本外史			6	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助	佐々木梅三郎	佐々木謙藏				
			孟子		6	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助	佐々木梅三郎	佐々木謙藏				
9	1月9日	経済要録			2	吉田榮太郎	増野徳民								
10	1月10日		禹貢		3	吉田榮太郎		玉木彦介	岡部繁之助						
			孟子		6	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助		佐々木謙藏				
11	1月11日	経済要録			2	吉田榮太郎	増野徳民								
			方正学文粹		1			玉木彦介							
12	1月12日	日本外史新田氏 訖る			4	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助						
		医学の要			1										
		経済要録 朝			2	吉田榮太郎	増野徳民								
		経済要録 夕方			2	吉田榮太郎	増野徳民								
		礼記			1										
		経済要録			3	吉田榮太郎	増野徳民								
13	1月13日	経済要録			2	吉田榮太郎	増野徳民								
14	1月14日		孟子		5	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助		佐々木謙藏				
		経済要録			2	吉田榮太郎	増野徳民								
15	1月15日		方正学文粹		1			玉木彦介							
		経済要録			2	吉田榮太郎	増野徳民								
16	1月16日	武教全書			5	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助		佐々木謙藏				
17	1月17日	図誌（坤輿図識 力）			2	吉田榮太郎	増野徳民								
		日本外史			4	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助						
		日本外史			4	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助						
18	1月18日	図誌 = 坤輿図識			2	吉田榮太郎	増野徳民								

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

「生徒」等											形態	記録者(全松陰・勉強以外の来室者名)				
國司仙吉	大賀春哉	熊野寅二郎	松陰	玉本文之進	妻木彌次郎	久保清太郎	土屋恭平	高橋藤之進	中谷	冷泉雅二郎			提山	佐世八十郎		
														読む	「野山獄読書記」に「図誌」はないが、正月の欄に「坤輿図識三冊 梅三・榮太・徳民の爲めに」とある。よって、内容より、坤輿図識か	
															読む	
															読む	
															読む	
															-	
															-	
															読む	
															講ず	
															読む	
															読む	
															読む	
															講ず	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読み了	
															読む	
															読む	
															講ず	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
															読む	
國司仙吉															読む	
															読む	

表8 安政四年(総合)野山獄読書記・丁巳日乗にみるテキスト、「生徒」、来室者など 2/3

	日付	テキスト			対 象											
		安政4	和 書	漢 籍	計	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助	佐々木梅三郎	佐々木謙藏	佐々木龜之助	杉梅太郎	有吉熊次郎	馬島春海	
19	1月19日		国誌 = 坤輿図識		3	吉田榮太郎	増野徳民									
20	1月20日		山陽詩鈔巻の一		3	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介								
				方正学文粹	1			玉木彦介								
21	1月21日		坤輿図識		3	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介		岡部繁之助		佐々木謙藏				
			山陽詩鈔		3	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介				佐々木梅三郎				
22	1月22日		日本外史補		2	吉田榮太郎	増野徳民									
			武教全書		4	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助							
23	1月23日		山陽詩鈔		3	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介								
			坤輿図識		3	吉田榮太郎	増野徳民					佐々木梅三郎				
24	1月24日		日本外史補		2	吉田榮太郎	増野徳民									
				孟子	4	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助							
25	1月25日		坤輿図識		3	吉田榮太郎	増野徳民									
			日本外史補		2	吉田榮太郎	増野徳民									
26	1月26日		坤輿図識		3	吉田榮太郎	増野徳民									
27	1月27日		長門金匱		2	吉田榮太郎	増野徳民									
28	1月28日		周南の文		2	吉田榮太郎	増野徳民									
			坤輿図識		3	吉田榮太郎	増野徳民									
29	1月29日		日本外史		4	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助							
			坤輿図識		3	吉田榮太郎	増野徳民									
30	2月1日			方正学文粹	1			玉木彦介								
			陰徳太平記		1											佐々木梅三郎
31	2月2日															
32	2月3日			中庸	1				岡部繁之助							
			陰徳太平記		1											
33	2月4日															
34	2月5日															
35	2月6日		周南の文		1	吉田榮太郎										
			周南の文		2	吉田榮太郎	増野徳民									
			周南の文		2	吉田榮太郎	増野徳民									
36	2月7日		周南の文		2	吉田榮太郎	増野徳民									
			周南の文		2	吉田榮太郎	増野徳民									
37	2月8日			中庸	1				岡部繁之助							
			周南の文		2	吉田榮太郎	増野徳民									
38	2月9日		周南の文		3	吉田榮太郎	増野徳民		岡部繁之助							
			周南の文		2	吉田榮太郎	増野徳民									
39	2月10日		周南の文		2	吉田榮太郎	増野徳民									
				礼記	1											
40	2月11日		周南の文		3	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介								
41	3月			名臣言行録後集	1											杉梅太郎
42			農業全書		3	吉田榮太郎	増野徳民									

表8 安政四年（総合）野山獄読書記・丁巳日乗にみるテキスト、「生徒」、来室者など 3/3

日付	テキスト			対 象									
	和 書	漢 籍	計	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助	佐々木梅三郎	佐々木謙藏	佐々木龜之助	杉梅太郎	有吉熊次郎	馬島春海
安政4		朱竹垞文粹	3	吉田榮太郎	増野徳民								
43			1					佐々木梅三郎					
44	陰徳太平記												
45		詩経集伝	3	吉田榮太郎	増野徳民					佐々木龜之助			
46	4月	三国志	2	吉田榮太郎	増野徳民								
47		茶山詩	1	吉田榮太郎									
48	5月		2		増野徳民							有吉熊次郎	
49		唐宋八家文 柳宗元・歐陽修	2			玉木彦介							馬島春海
50		新策	2	吉田榮太郎			岡部繁之助						
51		蒙求拾遺	2										
52		唐宋八家文 大蘇	1										
53		長井記	1					佐々木梅三郎					
54		山陽詩鈔	1			玉木彦介							
55	閏5月		0										
56	6月	詩経品物図攷	1		増野徳民								
57		三国志	2	吉田榮太郎	増野徳民								
58		女誠訳述	3	吉田榮太郎	増野徳民			佐々木梅三郎					
59		陰徳太平記	1					佐々木梅三郎					
60		精里三集	1				岡部繁之助						
61		唐宋八家文 柳宗元・歐陽修	2		増野徳民							有吉熊次郎	
62		関原合戦記											
63		唐宋八家文 歐陽修	3	吉田榮太郎	増野徳民	玉木彦介							
64		唐宋八家文 歐陽修	2		増野徳民							有吉熊次郎	
65		懲忿録	1						佐々木謙藏				
66		吉田物語附尾	1					佐々木梅三郎					
67		魏叔子文抄	2	吉田榮太郎	増野徳民								
68	7月	精里三集	1				岡部繁之助						
69	8月	陳龍川	1										
70	10日	論語序	5		増野徳民	玉木彦介	岡部繁之助						
71	15日												
72	9月		0										
73	10月	古文所見集	1										
74	11月	白石遺文	1										
75		楊升菴文集	1										
76		日本政記	1										

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

記録者は「門人」である。よって、「夕飯後」に「受」けた「外史」の「講釈」会を、「記録者」が岡部・佐々木謙藏・吉田・増野らと「門弟」だけで「夜」行った、と解釈することができる。また、前日三日の条に、松陰の手で、「夜、佐々木謙藏・岡部繁之助・彦介・徳民の為に孟子公孫丑の首章を講ず。龜之助も亦至る」とある。これより、あるいは、『孟子』の「講釈」を松陰から引き続き受けた、と取ることも可能である。詳細は不明。

七、一月六日、玉木文之進と一対一で、「読む」として、『牧民忠告』会を行っている。依然、玉木文之進が松陰を心配し、監督・激励のための学習会と思われる。

(二) 二月

勉強会は二月になり減少する。「丁巳日乗」の記録も二月「朔旦」から十一日迄で終わっている⁽⁴⁾。よって、それ以降は、「野山獄読書記」を中心として作成した。表10は安政四年二月の教育活動状況である。

表8・10より、二月は

表9 安政四年一月 丁巳日乗にみる教育活動状況

													延べ数			
		日本外史	経済要録	武教全書	周南の文	坤輿図識	山陽詩鈔	長門金匱	医学の要	孟子	牧民忠告	禹貢	方正学文粹	礼記	不明	-
1	吉田榮太郎	11	10	2	1	9	3	1		4		1			1	43
2	増野徳民	11	10	2	1	9	3	1		5					1	43
3	玉木彦介	7	1	2			3			5		3	5			26
4	岡部繁之助	8		2						5		3			1	19
5	佐々木梅三郎	1				7	1			1						10
6	佐々木謙藏	2		1		1				4		1			1	10
7	佐々木龜之助									0(1)						0(1)
8	妻木彌次郎											1				1
9	大賀春哉		1						1	1						3
10	國司仙吉													3		3
11	玉木文之進									0(1)						0(1)
	合計	40	22	9	2	26	1	9	2	1	25(1)	9	5	3	4	158(2)

一、記録のある十一日間に延べ二十五名（実数六名）が十五回の勉強会に参加した。

二、個人教育として、吉田榮太郎に『周南の文』会を一回、玉木彦介に一月より始めた『方正学文粹』会を一回、岡部繁之助に『中庸』会を一回、佐々木梅三郎に安政三年十月よりの『陰徳太平記』会を二回、國司仙吉に一月より始めた『礼記』会を一回行っている。この月の個人教育率は二八％である。集団教育中心である。

三、安政四年一月より始めた増野徳民・吉田榮太郎への『周南の文』会に、新たに玉木彦介・岡部繁之助が一回宛参加し、この月終了した。

四、外来者の参加占有率は八四％である。

五、「生徒」教育用テキストは和書三冊、漢籍三冊である。テキスト別参加率は和書八四％、漢籍一六％である。和書中心の教育である。

(三) 三月

表11は「野山獄読書記」による、三月の教育活動状況である。

表8・11より、三月は

一、延べ八名（実数三名）が五回の勉強会に参加した。

二、吉田榮太郎・増野徳民・「豊」に『農業全書』会を一回行っている。「豊」は不明^{④3}。

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

表10 安政四年二月 丁巳日乗にみる教育活動状況

		陰徳太平記	周南の文	周南の文	方正学文粹	中庸	礼記	延べ数
								-
1	吉田榮太郎		8	1				9
2	増野徳民		8					8
3	玉木彦介		1		1			2
4	岡部繁之助		1			2		3
5	佐々木梅三郎	2						2
6	國司仙吉						1	1
	合計	2	18	1	1	2	1	25

三、吉田榮太郎・増野徳民・佐々木龜之助に『朱竹坨文粹』会・『詩経集伝』会をそれぞれ一回行っている。佐々木龜之助はオブザーバー参加と思われる。

四、個人教育として、安政三年十月より始めた佐々木梅三郎への『陰徳太平記』会はこの月一回継続して実施している。この月の個人教育率は一二・五%である。集団教育中心である。

五、外来者の参加占有率は八七・五%である。

六、「生徒」教育用テキストは和書二冊、漢籍二冊である。テキスト別参加率は和書五〇%、漢籍五〇%である。

七、兄梅太郎と一対一で『名臣言行録後集』会を行っている。管見の及ぶ限り、これが父百合之助、叔父玉木文之進、兄梅太郎らが松陰を心配し、監督・激励の意味で開いた学習会の最後の記録である。

(四) 四月

安政四年四月は「野山獄読書記」の記録そのものが減少している。表12は安政四年四月の教育活動状況である。
表8・12より、四月は

一、延べ三名(実数二名)が二回の勉強会に参加した。

二、個人教育として、吉田榮太郎に『茶山詩』会を一回行っている。この月の個人教育率は三三・三%である。集団

表11 安政四年三月 野山獄読書記にみる教育活動状況

						延べ数	
		農業全書	陰徳太平記	名臣言行録後集	朱竹坨文粹	詩経集伝	
1	吉田榮太郎	1			1	1	3
2	増野徳民	1			1	1	3
3	佐々木梅三郎		1				1
4	佐々木龜之助				0(1)	0(1)	0(2)
5	杉梅太郎			0(1)			0(1)
6	豊	1					1
	計	3	1	0(1)	2(1)	2(1)	8(3)

教育中心である。なお、榮太郎への個人教育はこの月と安政四年二月の『周南の文』会の二回のみである。これは表13に見られるように、吉田榮太郎への個人教育は主要参加者の中でも少ない。

三、この月新たに、吉田榮太郎・増野徳民に、六月まで二回にわたる『三国志』会を開始している。

四、来室・勉強会参加者は吉田榮太郎・増野徳民のみで、外来者の参加占有率は一〇〇%である。

五、「生徒」教育用テキストは和書一冊、漢籍一冊である。テキスト別参加率は和書三三・三%、漢籍六六・七%である。漢籍中心である。

六、この四月は勉強会が減少している。その原因である。松陰は「野山獄読書記」四月の条に、「四月 是の月肝臓病あり、読書の少なきは先づトすべし。十二三日後初めて常に復す」と記し、また、「丁巳詩稿」には、「病に臥し自ら警む、時に榮太も亦病む。因つて書して之れを贈る」と題して、「鴻業艱難多し、寧んぞ一死地なからんや。糜粥胃腸を調へ、湯薬医治に委す。鋭を養ふは平生に在り、慎んで病を將つて戯るるなかれ」と詠んでいる。これより、この月、松陰は「肝臓病」を病み、吉田榮太郎も「病」であったことが分かる。

なお、「丁巳日乗」一月三日の条に、「暁、阿豊急病あり、医岡田以伯・松岡良哉来る」とある。「阿豊」は兄梅太郎の長女で、松陰の姪である。それに「岡田以伯・松岡良哉」が往診していたことが分かる。

岡田以伯は「文化十四年七月二十八日に萩藩医岡田宗伯の子として萩の東郊松本権原に生れた」人で、その「母は近所に住んでゐた同藩士杉百合之助常道の長女のぶ（文政八年九月朔日生）である。故にのぶは吉田松陰の姉にあたる。

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

表12 安政四年四月
野山獄読書記にみる教育活動状況

			延べ数
		茶山詩	1
		三国志	2
1	吉田榮太郎	1	2
2	増野徳民	1	1
	計	1	2
			3

山賀生	大賀春哉	國司仙吉	高橋藤之進	土屋恭平	中谷茂十郎カ	冷泉雅二郎	提山	佐世八十郎	計	総計
									0	0
1 新論									1	5
									30	44
									3	8
									5	5
	1 医学の要	3 礼記							4	10
		1 礼記							4	7
									0	1
									1	1
			1 唐宋八家 文大蘇						1	3
									0	0
									2	5
									1	1
				1 陳龍川文抄					1	1
									0	0
					1 古文所見集				1	1
						1 白石遺文	1 日本政記	1 楊升菴文集	3	3
1	1	4	1	1	1	1	1	1	57	95
1	3	5	1	1	1	1	1	1		
100	33.3	80	100	100	100	100	100	100		

表13 個人教育記録

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

		玉木彦介	佐々木梅三郎	佐々木謙藏	高須瀧之允	倉橋直之助	計	増野徳民	吉田榮太郎	岡部繁之助
安政3	8									
	9	2(蒙求)			2陰徳太平記		4			
	10	5陳龍川文抄	8陰徳太平記			1礼記	14	30春秋左氏伝		
	11	2陳龍川文抄	3陰徳太平記				5	3春秋左氏伝		
	12						0			1兵要録・4父師善誘法
安政4	1	5方正学文粹	1坤輿図識				6			
	2	1方正学文粹	2陰徳太平記				3		1周南の文	2中庸
	3		1陰徳太平記				1			
	4						0		1茶山詩	
	5	1山陽詩抄	1長井記				2			
	閏5						0			
	6		1陰徳太平記・1吉田物語附尾	1懲忿録			3	1詩経品物図攷		1精里三集
	7						0			1精里三集
	8						0			
	9						0			
	10						0			
	11						0			
		16	18	1	2	1	38	34	2	9
個人の全受講数		46	31	11	3	4		118	82	39
個人教育受講率%		34.8	58.1	9.1	66.7	25		28.8	2.4	23.1

(中略) 松陰は時々治療を受けていた人で、後、「文久三年頃より藩主毛利敬親および世子夫人の侍医⁽⁴⁷⁾」となった医者である。

また、松岡良哉「名は経平」は「文化二年熊毛平生に生れ」た人で、「天保十三年に当時防長医界の泰斗として名声天下に高かつた賀屋恭安が死んだが、その最後は経平に治療を一任してあるところから考へると少壮にしてその学識人格がすぐれてゐたことがわかる。吉田松陰も経平の治療をうけてゐる」とされる人である。松岡は後「一代藩医⁽⁴⁸⁾」となつてゐる。

これより、松陰を診察したのはこの二人かどちらかの一人であろう。医者としての二人の業績より、「肝臓病」との見立はほぼまちがいないものと思われ⁽⁴⁹⁾る。

以上より、この四月、松陰が病気だつたことが記録・勉強会減少の原因であろう。また、吉田榮太郎も病気であつたことは、それに拍車をかけたものと思われる。これより、松陰がいかに榮太郎を評価していたかが分かる。

(五) 五月

安政四年五月、新たに有吉熊次郎、馬島春海、高橋藤之進が来室し、勉強会は再び勢いを取り戻す。表14は安政四年五月の教育活動状況である。

表8・14より、五月は

一、延べ十一名(実数十名)が七回の勉強会に参加した。

二、この月新たに、吉田榮太郎・岡部繁之助と『新策』会を一回、國司仙吉、「佐」と『蒙求拾遺』会を一回行つてゐる。「佐」は佐々木梅三郎か佐々木謙藏のどちらかと思われる。

三、個人教育として、玉木彦介に安政四年一月に行った『山陽詩鈔』会を一回行っている。松陰が彦介に追加の要を認めた故か。また、佐々木梅三郎に『長井記』会を一回、新たに入室した高橋藤之進に『唐宋八家文 大蘇』会を一回行っている。この月の個人教育率は二七・三％である。集団教育中心である。

四、新たに入室した有吉熊次郎と増野徳民に『唐宋八家文 柳宗元・歐陽修』会を一回行っている。翌六月は増野を玉木彦介に変えて継続している。

五、新たに入室した馬島春海と玉木彦介に『唐宋八家文 蘇洵』会を一回行っている。

六、新たな外来者が増え、外来者の参加占有率は六三・六％である。

七、「生徒」教育用テキストは和書四冊、漢籍三冊である。

テキスト別参加率は和書五四・五％、漢籍四五・五％である。

八、翌閏五月は勉強会の記録が皆無である。この原因は、松陰が烈婦登波の伝記「討賊始末」の原稿執筆に集中していたからと思われる。⁵⁰⁾

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

表14 安政四年五月 野山獄読書記にみる教育活動状況

		新策	蒙求拾遺	長井記	山陽詩抄	柳宗元・歐陽修	唐宋八家文	蘇洵	唐宋八家文	唐宋八家文	大蘇	延べ数
1	吉田榮太郎	1										1
2	増野徳民					1						1
3	玉木彦介				1			1				2
4	佐々木梅三郎			1								1
5	佐		1									1
6	岡部繁之助	1										1
7	國司仙吉		1									1
8	有吉熊次郎					1						1
9	馬島春海							1				1
10	高橋藤之進									1		1
	計	2	2	1	1	2	2	2		1		11

(六) 六月

六月は新たな勉強会が見られる。表15は安政四年六月の教育活動状況である。

表8・15より、六月は

一、延べ十九名(実数七名)が十二回の勉強会に参加した。

二、新たに、吉田榮太郎・増野徳民・佐々木梅三郎に『女誠訳述』会を一回行っている。

三、個人教育として、増野徳民に『詩経品物図攷』会を、佐々木梅三郎に『陰徳太平記』会・『吉田物語附尾』会を、佐々木謙藏に『懲愆録』会を、岡部繁之助に『精里三集』会をそれぞれ一回宛行っている。この月の個人教育率は二六・三％である。集団教育中心である。

四、新たに、吉田榮太郎・増野徳民・玉木彦介に『唐宋八家文歐陽修』会を、増野徳民・有吉熊次郎に『唐宋八家文歐陽修』会を、吉田榮太郎・増野徳民に『魏叔子文抄』会をそれぞれ一回宛行っている。

五、先月五月、新たに入室した有吉熊次郎及び増野徳民に一回行った『唐宋八家文 柳宗元・歐陽修』会を、対象を有吉熊次

表15 安政四年六月 野山獄読書記にみる教育活動状況

											延べ数			
		女誠訳述	陰徳太平記	精里三集	吉田物語附尾	関原合戦記	詩経品物図攷	三国志	唐宋八家文 柳宗元・歐陽修	唐宋八家文 歐陽修	唐宋八家文 歐陽修	懲愆録	魏叔子文抄	-
1	吉田榮太郎	1						1		1			1	4
2	増野徳民	1					1	1	1	1			1	7
3	玉木彦介									1				1
4	佐々木梅三郎	1	1		1									3
5	佐々木謙藏											1		1
6	久保清太郎					0(1)								0(1)
7	岡部繁之助			1										1
8	有吉熊次郎								1		1			2
	計	3	1	1	1	0(1)	1	2	2	3	2	1	2	19(1)

郎・玉木彦介と変えて継続している。

六、外来者の参加占有率は七三・七％である。

七、「生徒」教育用テキストは和書四冊、漢籍七冊である。テキスト別参加率は和書三一・六％、漢籍六八・四％である。漢籍中心である。

七、来室した畏友久保清太郎と学習会『関ヶ原合戦』会を一回行っている。久保はあるいは松陰を心配し、激励のために来室したものであろう。

(七) 七月

七月は勉強会の記録が激減する。表16は安政四年七月の教育活動状況である。

表8・16より、七月は

一、延べ一名(実数一名)が一回の勉強会に参加した。

二、六月から継続の岡部繁之助への個人教育『精里三集』会一回のみである。個人教育率は一〇〇％である。

三、「生徒」教育用テキストは和書一冊のみで、テキスト別参加率は和書一〇〇％である。外来者の参加占有率一〇〇％である。この七月以降、幽囚室での松陰の教育活動は衰頹傾向が見られる。この原因は調査中。

表16 安政四年七月
野山獄読書記にみる教育活動状況

		延べ数	
		精里三集	
1	岡部繁之助	1	1
計		1	1

(八) 八月

「丁巳日乗」の八月に関する記録は「八月十日」「十五日」「二十日」のみである。よって、安政四年八月の教育活動状況は「丁巳日乗」に「野山獄読書記」を加えて作成した表17の通りである。

表8・17より、八月は

- 一、延べ五名（実数五名）が二回の勉強会に参加した。
- 二、新しく来室した土屋恭平の「為めに」⁽³²⁾として、個人教育「陳龍川文」会を一回開始している。この月の個人教育率は二〇%である。
- 三、「丁巳日乗」に「八月十日 論語序、熊野寅二郎・徳民・岡部繁二郎・松陰・玉木彦介、以上講ず。序了る」⁽³³⁾とある。「松陰」と自身の名前を四番目に記していることより、あるいは、この順番で五名で輪講した、という意味かもしれない。とすれば、増野「徳民」、「岡部」繁之助、「玉木彦介」の学問的成長の証左と見ることができる。
- 四、「生徒」教育用テキストは漢籍二冊で、テキスト別参加率は漢籍一〇〇%である。外来者の参加占有率八〇%である。

(九) 十月

安政四年九月は「丁巳日乗」に記録がなく、「野山獄読書記」の記録だけである。その「野山獄読書記」の九月の条には教育活動状況の記録はなく、松陰の読書記録のみである。表18は安政四年十月の教育活動状況である。

表17 安政四年八月
丁巳日乗・野山獄読書記にみる教育活動状況

		論語序	陳龍川文	延べ数
				-
1	熊野寅二郎	1		1
2	増野徳民	1		1
3	岡部繁二郎	1		1
4	松陰	0(1)		0(1)
5	玉木彦介	1		1
6	土屋恭平		1	1
	計	4(1)	1	5(1)

表8・18より、十月は

- 一、延べ一名（実数一名）が一回の勉強会に参加した。
- 二、個人教育として、畏友中谷正亮の甥中谷茂十郎に『古文所見集』会を一回行っている。個人教育率は一〇〇％である。
- 三、「生徒」教育用テキストは漢籍一冊で、テキスト別参加率は漢籍一〇〇％、外来者の参加占有率一〇〇％である。

(十) 十一月

十一月は、「十一月五日、久保氏と力を協せ、杉氏の宅地内に在る小舎を修補して松下村塾に充て、この日を以て開く。塾主表面は尚ほ久保氏なるも、事實は松陰の主宰なり」とある。⁽⁵⁴⁾この十一月は新たに入室した外来者三名に対し、各一回のみの勉強会の記録がある。表19は安政四年十一月の教育活動状況である。

表8・19より、十一月は

- 一、延べ三名（実数三名）が三回の勉強会に参加した。
- 二、冷泉雅二郎、提山、佐世八十郎が新たに入室した。
- 三、個人教育として、冷泉に『白石先生遺文』会、提山に『楊升菴文集』会、佐世に『日本政記』会をそれぞれ一回行っている。この月の個人教育率は一〇〇％である。

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

表19 安政四年十一月
野山獄読書記にみる教育活動状況

				延べ数	
		白石遺文	日本政記	楊升菴文集	-
1	冷泉雅二郎	1			1
2	提山			1	1
3	佐世八十郎		1		1
	計	1	1	1	3

表18 安政四年十月
野山獄読書記にみる教育活動状況

			延べ数
		古文所見集	-
1	中谷茂十郎カ	1	1
	計	1	1

四、「生徒」教育用テキストは和書二冊、漢籍一冊である。テキスト別参加率は和書六六・七％、漢籍三三・三％である。外来者の参加占有率は一〇〇％である。

おわりに

以上述べた、松陰の安政三年八月から安政四年十一月までの間における、幽囚室での教育活動の月毎の変遷をまとめたものが表20である。

幽 囚 室										松下 村塾
安政四年										計
2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	10月	11月		
8	3	1	3	6	0	1	0	0	92	
1	0	0	2	2	0	1	0	0	19	
3	3	2	6	3	0	3	0	0	28	
4	3	2	8	5	0	4	0	0	47	
1	0	0	2	2	0	1	0	0	59	
17	7	2	6	12	0	3	0	0	204	
18	7	2	8	14	0	4	0	0	263	
0	0	0	0	0	0	0	1	0	6	
7	1	1	3	5	1	1	1	3	95	
1	1	0	2	2	0	0	0	0	16	
4	0	1	1	1	1	1	1	3	18	
5	1	1	3	3	1	1	1	0	34	
1	1	0	2	2	0	0	0	0	40	
6	0	1	1	3	1	1	1	3	55	
7	1	1	3	5	1	1	1	3	95	
9	4	3	11	8	1	5	1	0	78	
25	8	3	11	19	1	5	1	3	358	
3	1	0	3	3	0	0	0	0	60	
18	3	1	3	3	1	0	0	2	150	
21	4	1	6	6	1	0	0	2	210	
1	0	0	1	2	0	1	0	0	38	
3	4	2	4	11	0	4	1	1	106	
4	4	2	5	13	0	5	1	1	144	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
25	8	3	11	19	1	5	1	3	358	
0	3	0	0	1	0	0	0	0	36	
0	2	0	0	1	0	0	0	0	14	
0	3	0	0	1	0	0	0	0	36	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	10月	11月	計	
安政四年										

表20 月毎の変遷

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

家庭教育					準備・基礎教育		準備期			
「私塾」教育										
	年	血縁・地縁者と外来者別	安政三年							
	月		8月	9月	10月	11月	12月	1月		
集団教育	実施回数		1	2	1	0	20	46		
	実参加者数	血縁・地縁者	3	3	2	0	2	3		
		外来者	0	0	1	0	2	5		
	計		3	3	3	0	4	8		
	延べ参加者数	血縁・地縁者	3	6	2	0	2	40		
		外来者	0	0	1	0	48	108		
計		3	6	3	0	50	148			
	延べオブザーバー参加者数		3	1	0	0	0	1		
個人教育	実施回数		0	5	44	8	5	10		
	実参加者数	血縁・地縁者	0	2	3	2	1	2		
		外来者	0	1	1	1	0	2		
	計		0	3	4	3	1	4		
	延べ参加者	血縁・地縁者	0	4	14	5	5	6		
外来者		0	1	30	3	0	4			
計		0	5	44	8	5	10			
集団+個人教育	実参加者数		3	6	7	3	5	12		
	延べ参加者数		3	11	47	8	55	158		
教育での使用テキスト別参加者数	和書延べ参加者数	血縁・地縁者	3	9	8	3	1	26		
		外来者	0	0	0	0	33	86		
	計		3	9	8	3	34	112		
	漢籍延べ参加者数	血縁・地縁者	0	2	9	2	1	19		
		外来者	0	0	30	3	20	23		
	計		0	2	39	5	21	42		
	不明図書参加者数	血縁・地縁者	0	0	0	0	0	1		
		外来者	0	0	0	0	0	3		
計		0	0	0	0	0	4			
総計		3	11	47	8	55	158			

松陰のための学習会（勉強会）

学習会（勉強会）	松陰・来室者間での 一対一の勉強会	学習会回数	4	7	9	3	8	1
		実参加者数	1	2	3	2	2	1
		延べ参加者数	4	7	9	3	8	1
	来室者同士での勉強会	勉強会回数	0	0	1	0	0	0
		実参加者数	0	0	2	0	0	0
		延べ参加者数	0	0	2	0	0	0
月		8月	9月	10月	11月	12月	1月	
年		安政三年						

これより、吉田松陰の幽囚室教育に關し

一、安政三年八、九月は家庭教育である。それは『武教全書』会が中心であった。なお、八月は集団教育、使用テキストは和書である。九月に個人教育（和書『陰徳太平記』会（高須瀧之允）・和書『新論』会（山賀生）・漢籍『蒙求』会（玉木彦介））が開始された。その使用テキストは和書中心であった。とりわけ、高須や彦介へのテキストを見れば、基礎教育、将来の「私塾」教育に向けた準備教育であったことが分かる。

二、安政三年十月、外来者増野徳民の来室で、個人教育の形で具体的な「私塾」教育に向けた基礎・準備教育が始まる。松陰は増野への『春秋左氏伝』会を三十回行っている。十月の使用テキストは漢籍中心である。

三、十一月、幽囚室教育は低迷する。個人教育（和書『陰徳太平記』会三回（佐々木梅三郎）・漢籍『春秋左氏伝』会三回（増野徳民）・漢籍『陳龍川文抄』会二回（玉木彦介））のみである。この月の中心はテキスト作成作業で、陰待望の「私塾」教育に向けた準備期間と考えられる。

四、安政三年十二月、幽囚室教育は本格化する。それは外来者の成長、増加が主因であろう。その結果、松陰待望の『日本外史』会という教育内容の質的变化を認めることができる。この状況は安政四年六月まで継続した。

この間の実参加者数は血縁・地縁者四名（玉木彦介・佐々木梅三郎・佐々木謙藏・「佐」）、外来者十名（吉田榮太郎・増野徳民・岡部繁之助・妻木彌次郎・大賀春哉・國司仙吉・豊・有吉熊次郎・馬島春海・高橋藤之進）で、勉強会への延べ参加者は血縁・地縁者四十七名、外来者二百名である。また、この間の使用テキストは安政三年十二月から四年二月までは和書中心。三月は和・漢籍同数。四月、六月は漢籍、五月は和書中心である。安政三年十二月から四年六月までの間、和書勉強会への延べ参加者は百八十四名（血縁・地縁者三十七名、外来者百四十七名）で、漢籍勉強会へは延べ九十一名（血縁・地縁者二十四名、外来者六十七名）である。和書勉強会への参加者が多い。

五、安政三年十二月から四年六月までの間、個人教育に大きな変化は見られない。この間の個人教育は三十二回（内、血縁・地縁者十六回、外来者十六回）である。

六、安政四年七月以降、「野山獄読書記」の記録を見る限り「私塾」教育としての幽囚室教育は「衰頹」⁽⁵⁵⁾した。集団教育は八月の漢籍『論語序』会（玉木彦介のみ血縁者。他の熊野寅二郎・増野徳民・岡部繁二郎は外来者）一回のみである。他は六回の個人教育（和書『精里三集』会（岡部繁之助）・漢籍『陳龍川文抄』会（土屋恭平）・漢籍『古文所見集』会（中谷茂十郎）・和書『白石遺文』会（冷泉雅二郎）・和書『日本政記』会（提山）・漢籍『楊升菴文集』会（佐世八十郎））が確認できる。参加者は全て外来者、使用テキストは和書・漢籍半々である。

七、松陰は新たな外来者に対し個人教育、それも漢籍教育を行う傾向が見られる。安政三年九月来室の山賀生、十月の増野徳民、十二月の岡部繁之助、安政四年一月の大賀春哉・國司仙吉、五月の高橋藤之進、八月の土屋恭平、十月の中谷茂十郎、十一月の冷泉雅二郎・提山・佐世八十郎がそれである。一方で、安政三年十二月来室の吉田榮太郎、安政四年一月の妻木彌次郎、三月の「豊」、五月の有吉熊次郎・馬島春海、八月の熊野寅二郎・岡部繁二郎に對しては行っていない。この原因については研究中。

八、父杉百合之助、叔父玉木文之進、兄梅太郎らが松陰を心配し、監督・激励の意味で開いた学習会は安政四年三月が最後である、ということが指摘できる。

註

(1) 松下村塾に関し、玖村敏雄は「有隣はその二十五日『松本村に延き、立てて塾の師となす』。富永はこれから三無生と力を戮せて邑学振興の事に従った。（中略）こゝで塾といふのは松陰の幽室に隣る杉家の客間であつたと推定せられる。かくて富永を

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考（川口）

表面の塾師となし、松陰を裏面の主持者とし、久保清太郎を忠実なる協同者として、安政四年七月の終頃松陰の松下村塾の基礎は全く確立した」（玖村敏雄『吉田松陰』岩波書店、昭和十七年、二三三頁。）と記している。一方、高橋文博氏は（安政三年時）「教えを受ける常連がいるから、松陰の幽室を学塾といってもよいが、これはいわゆる松下村塾ではない。（中略）安政四年八月から九月にかけて入塾するものが急増し、二〇人を超える新規の来塾者があった。（中略）こうなると幽室四畳半では狭いので、杉家の敷地内にあつた小屋を修理して塾舎とすることにし、安政四年十一月五日に八畳一間の新塾舎が完成した。松陰は、幽室からここに移って起居することになる。松陰が主宰し、富永・清太郎が補佐する、松陰の松下村塾が、このとき誕生した」（高橋文博『吉田松陰』清水書院、二〇〇五年、一一三―一六頁。）と述べている。なお、『吉田松陰全集』の「吉田松陰年譜」には、安政四年「十一月五日、久保氏と力を協せ、杉氏の宅地内に在る小舎を修補して松下村塾に充て、この日を以て開く。塾主表面は尚ほ久保氏なるも、事實は松陰の主宰なり」（山口県教育会編『吉田松陰全集』大和書房、昭和四十九年、九卷、六七七頁。以下、同全集からの引用は、「吉田松陰年譜」（『全集』九卷、六七七頁。）と略記する。）とある。ただし、「門弟」より「家学教授の許可申請書」が提出され、萩藩政府からの正式の許可が下りたのは安政五年七月二十日である。この間の経緯は「家学教授許可関係文書 安政五年」（九卷、八九―九一頁。）参照。

(2) 「野山獄読書記」（『全集』九卷、四二七頁）。

(3) 前書、四二八頁。安政二年六月、松陰が野山獄で同囚相手に始めた『孟子』の「講読」会のこと。安政二年十二月十五日、松陰の野山獄出獄後、十二月二十四日に幽囚室で一度行われた。その後なぜか中断し、安政三年三月二十一日に再開された。この時、松陰は「歳維れ丙辰、律、姑洗に中る。春服既に成れども、浴沂の心を絶ち、芳林正に華ひらけども、踏青の楽しみを忘る。閤を閉ざして書を読み、独り昼長きを喜び、客を謝し事を省きて、幸に世の囂しきを脱る。下浣の初め、念一の夕、父兄親戚同じく一堂に会して復た旧業を尋ね、爰に劄記を修して、歲月を記し、千万年に伝ふ。二十一回猛士自ら題す」（「講

孟劄記』『全集』三卷、一三七頁。）と決意を記している。

(4) 前書、四一九頁。

(5) 前書、四三〇頁。

(6) 前書、四三三頁。

(7) 前書、四三四―四三五頁。

(8) 前書、四三七頁。

(9) 「関係人物略伝 佐々木龜之助」(『全集』十卷、五三二頁)。

(10) 「武教全書講録」(『全集』四卷、一一頁)。

(11) 山鹿素行研究の大家堀英雄氏は、素行は『武教小学』を『武教全書』の巻頭におき、前者において武士の道德を、後者において戦術を述べ、以て山鹿流兵学の教科書とし(中略)兵学の重点が日常の修養・道徳にあることを強調し、『小学』の道を体得して始めて『全書』の戦術を正しく用い得ること、即ち武士たるの道を知らぬ者は、戦術を学ぶ資格の無いことを示そうとした(堀英雄『人物叢書 山鹿素行』吉川弘文館、平成六年、一四五―一四六頁。)と述べている。また、松陰自身、「武教全書講録」の「惣目録」に、「武教は修身・齐家・治国・平天下より初め、戦勝、攻守の術に至るまで包ねざることなし。天下諸侯より一士一卒に至る迄、学びて不可なるあるなし。是れ其の大意なり。近世談兵家は是れを知らずして、異端曲説に陥るの弊は、自序是れを詳論す。其の所にて尚ほも講ずべし」(『全集』四卷、五七頁。)と述べており、『武教全書』を全て講義しようと考えていたことはまちがいない。ところが、実際に講義したのは巻頭の『武教小学』と『武教全書』の「惣目録」の部分だけであった。しかし、松陰が、堀氏の指摘した、素行の教えを理解していたことはまちがいでなく、それで題を敢えて「武教全書講録」としたものであろう。

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考(川口)

- (12) 「葉山左内宛」(『全集』七卷、六五頁)。松陰は嘉永四年七月五日のこの書簡中より「生徒」という言葉を使用している。
- (13) 「丙辰日記」(『全集』九卷、四七七頁)。
- (14) 前書。同頁。
- (15) 前書。同頁。
- (16) 福本義亮『松下村塾をめぐりて(復刻版)』マツノ書店、平成十年、一一三頁。
- (17) 「丙辰日記」(『全集』九卷、四七八頁)。
- (18) 『新論』をテキストにしていることは、「山賀生」が学力、思想両面で初学者ではなかった証左となる。あるいは、「山賀生」は八月の佐々木龜之助同様、松陰の切磋琢磨の仲間だったのかもしれない。
- (19) 「丙辰日記」(『全集』九卷、四七八頁)。
- (20) 前書。四七九頁。
- (21) 前書。四七八―四七九頁。
- (22) 「丙辰日記」(山口県教育会編『吉田松陰全集』岩波書店、昭和十年、五卷、四三八頁)。以下、「丙辰日記」(『定本全集』五卷、四三八頁)。と略記する。
- (23) なぜか、十一月三日のみ実施していない。なお、増野との『春秋左氏伝』の勉強会は、十月二十九日から十二月十一日迄の計九回、実父杉百合之助と「読む」とある『春秋左氏伝』の勉強会とは別に行ったものである。
- (24) 正式には、『陳龍川文抄』のことか。
- (25) 「丙辰日記」(『全集』九卷、四七九―四八〇頁)。
- (26) 前書、四八〇頁。

(27) 拙稿「下田渡海考」(田中彰編『幕末維新の社会と思想』吉川弘文館、一九九九年。一二六一―一五一頁)参照。

(28) 「講孟劄記」(『全集』三卷、九六頁)。

(29) 前書。三六七頁。

(30) そもそも、萩藩兵学師範としてではなく、個人としての松陰はいつ頃から何を目的として教育を志向したのであろうか。それは私の研究では、安政元年三月二十七日の米使ペリー刺殺を目的とした「下田」事件の失敗後からである。目的は、再蹶起計画に向けての同志・シンパサイザーの獲得・育成である。それは、松陰が江戸獄から、熊本へ帰国する同志宮部鼎藏に「とかかへりたけき教を弘めて給へ広き大和に誰れかあるらん」(『宮部鼎藏宛』『全集』七卷、二三一頁。)と激励を送り、また、自身も、萩へ護送される途中、「大樹まさに顛仆せんとす、一繩の維ぐべきに非ず。且く北園の棘を除き、盛んに桃李の枝を植ゑん」(『松陰詩稿』『全集』六卷、四一頁。)と詠っていたことから分かる。後、安政三年十一月の時点でも、松陰は「己を修めて時を待ち、節を励まして国に報ゆ」(『緑野堂記』『全集』二卷、四四九頁。)と述べている。

(31) 松陰は、嘉永二年に「人の善言懿行を見て之れに效ひ、又聖賢の書を読みて前言往行を考へ、身に行はんとする類、学ぶと云ふべし」(『講義存稿三篇』『全集』一卷、九七頁。)と記し、嘉永四年には「余、平生聖賢の書を読み、其の徳業風采を想ふ。志の存する所ここに在り」(「題を賜ひて『人の富山に登るを送る序』を探り得て謹んで撰す」一卷、二八五頁。)と述べ、安政二年十一月には「読書の術の如き、世或は経を好み史を廢する者あり。是れ大いに非なり。吾れ常に史を読み古人の行事を見て、志を励ますことを好む」(『講孟劄記』『全集』三卷、一八九頁。)と講じている。

(32) 貝原益軒著石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』岩波書店、一九七六年、二五二頁。

(33) 私の研究によれば、庄内藩校致道館においては、入学時の「句読生」(十歳〜十四歳)修了後「操揚生」となるが、その「操揚生」が学ぶべき教科書の最初に「春秋左氏伝」とある。「拙稿」第一章近代前の教育 第一節日本における近代前の教育 三

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考(川口)

近代前の教育の内容 1 武士教育」（佐藤尚子・大林正昭編『日中比較教育史』春風社、二〇〇二年、一五頁）参照。更に、多田建次氏は「閑谷学校」での『春秋左氏伝』について、「入学者は庶民の子どもがおもで、藩士子弟や他領の者もゆるされた。教科は手習いをはじめ、『孝経』『小学』や四書五経の初歩、希望者にはさらに『左伝』『史記』などの史書、諸子百家の書、和算・天文・暦学なども教授した」（多田建次『学び舎の誕生』玉川大学出版部、一九九二年、一五七頁参照。）と述べている。これらより、『春秋左氏伝』は寺子屋での基礎教育を修了したレベルの者が学ぶテキストであることが分かる。この点では、増野に合ったテキストだったのかもしれない。

(34) 鎌田正「春秋左氏傳 解題」（『新釈漢文大系30 春秋左氏伝』明治書院、平成五年、一〇―一二頁）。

(35) 「借本録」（『全集』九卷、四六七―四七三頁）。

(36) 石川松太郎「私塾」（『国史大事典編集委員会編『国史大事典 第6巻』吉川弘文館、平成九年、七七―二頁）。

(37) 尾藤正英「解説」（『頼成一・頼惟勤訳『日本外史（上）』岩波書店、一九九〇年、八一―二頁）。

(38) 「丙辰日記」（『全集』九卷、四八二頁）。具体的には、「講す。（毅甫・徳榮の爲め）」とある。へ内は割註。以下同。

(39) 安政四年一月十一日の条には、「春哉の爲めに医学の要を論ず」（『丁巳日乗』『全集』九卷、四九七頁）とある。この「医学の要」が書籍か否か不明であるが、ここでは一冊とカウントする。

(40) 「丁巳日乗」（『全集』九卷、四九六頁）。

(41) 前書、同頁。

(42) この後、「丁巳日乗」の記録は安政四年「八月十日」、「十五日」のみである。なお、八月二十日は「二十日」（『丁巳日乗』『全集』九卷、五〇―一頁。）と、日付があるのみで記述はない。これらの理由については、調査中。

(43) 松陰の兄杉梅太郎の娘、つまり松陰の姪の名前が「豊」である。しかし、この「豊」か否か不明。

(44) 「野山獄読書記」(『全集』九卷、四四七頁)。「丁巳詩稿」には、「初夏、病に臥す」と題して「麥天昼漸く長し、まさに是れ読書の日。何如せん痾を抱くの身、裘を重ねて幽室に伏す。幽室甚だ無聊、百務渾て廃失す。瓶花尽く飄零ち、積塵書帙に満つ」(「丁巳詩稿」『全集』六卷、一六二―一六三頁)と詠んでいる。かなり長期的な病気であったことが分かる。

(45) 「丁巳詩稿」(『全集』六卷、一五五頁)。

(46) 「丁巳日乗」(『全集』九卷、四九五頁)。

(47) 田中助一『防長医学史 下』防長医学史刊行後援会、昭和二十八年、四一五頁。

(48) 同前書、四三四頁。

(49) 野坂誠士氏(医学博士、岩国みなみ病院 院長・理事長)によれば、「当時の医学的な診断は、触診、視診によると思われる。おそらく肝腫大や黄疸があり、肝臓病との診断に至ったと思われる。肝臓病は慢性化しやすいが、A型肝炎であれば二三週間で軽快することが多い。その原因は生水や海鮮類などの生食によるウイルス感染と考えられる」とのことである。よって、松陰が「十二日後初めて常に復す」と書いていることより、A型肝炎であった可能性が高い。

(50) 安政四年閏五月三日、松陰は「士別れて三日なれば、刮目して相待つ、一日見ずんば、三歳の如し。朋友相互の情、学問日進の機、誠にかくの如きものあり、況や一月に於てをや。余頃ろ心に一文を構ふれども、事、考據に待つあり、遽率に能く弁ずる所に非ず。因つて蔽に一月を課し、諸君を謝絶し他業を廃棄し、以て之れを成就せんと欲す。牀に對し燈を分つ、平日の情、裁割すること易きに匪ず。ここを以て文を作つて諸君に辞す。諸君願ふに亦時に乗じて精苦し、以て吾が目刮して、三歳の情を慰むるあれ」(「諸生に示す」『全集』四卷、八五頁)と述べ、幽囚室教育仲間事情を説明すると共に、エールを送っている。

(51) 「丁巳日乗」(『全集』九卷、五〇一頁)。

吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考(川口)

(52) 「野山獄読書記」(『全集』九卷、四五六頁)。

(53) 「丁巳日乗」(『全集』九卷、五〇二頁)。岡部繁之助は、「関係人物略伝」に「長藩士岡部藤吾の次男」とある。よって、「岡部繁二郎」は次男と意識していた松陰の誤記で、岡部繁之助のことと思われる。

(54) 「吉田松陰年譜」(『全集』十卷、六七七頁)。

(55) この「衰頹」は、「関係人物略伝」が「安政三年三月、眼病治療のため筑前に赴き、次いで九州諸国を遊歴し、肥後に至りて宮部鼎蔵に会し、松陰の英名を聞き、帰路連りに文通を始む。これまた交を結ぶ一面の動機なり。然れども幽室に於て親しく教を受くるに至りしは、翌年のことなるべし」(『全集』十卷、五〇九頁。)という久坂玄瑞、また、同様に「安政四年十九歳夏秋の間松下村塾に入門」(同前書、五四九頁。)という高杉晋作に関する記録が「野山獄読書記」及び「丁巳日乗」に皆無であることとの関連において考える必要がある。この問題は現在研究中。

(かわぐち まさあき・皇學館大学文学部特命教授、広島大学教育学修士)